

武蔵野日曜聖書講筵

葡萄樹

―― 詩篇第80篇 ――

1976年11月28日

小池辰雄

論文「芸術のたましい」 民族の歴史 天極道 具体的な表現で象徴的なもの 信即現 即如
の世界 「イン」「の中に」という世界 「主さま！」と呼んで祈る 神は大芸術家 祈り

【詩篇80】

1 イスラエルの牧者よ、

ひつじの群のごとくヨセフを導きたもうものよ、

耳をかたむけたまえ。

ケルビムのうえに坐したもうものよ、

光をはなちたまえ。

2 エフライム、ベニヤミン、マナセの前に

なんじの力をふりおこし、

来りてわれらを救いたまえ。

3 神よふたたびわれらを復し、

なんじの聖顔のひかりをてらしたまえ。

然らばわれら救いをえん。

4 ばんぐんの神エホバよ

なんじその民の祈りにむかいて

何のときまで怒りたもうや。

5 汝かれらになみだの糧をくらわせ

涙を量器にみちみつるほど

あたえて飲ましめ給えり。

6 汝われらを隣人のあいあらそう種料となしたもう。

われらの仇はたがいにあざわらえり。

7 万軍の神よ、

ふたたびわれらを復したまえ。

汝のみかおの光をてらしたまえ。

さらばわれら救いをえん。



8 なんじ葡萄の樹をエジプトより携えいだし
もろもろの国人くにびとをおいしりぞけて
之をうえたまえり。

9 汝そのまえに地をもうけたまいしかば
深く根ねざして国にはびこれり。

10 その影はもろもろの山をおおい、
そのえだは神の香柏のごとくにてありき。

11 その樹はえだを海にまでのべ、
その若枝わかえを河にまでのべたり。

12 汝いかなればその垣かきをくずして
路ゆくすべての人に摘つみ取らせたもうや。

13 はやしの猪いのししはこれをあらし、
野のあらき獣はこれをくらう。

14 ああ万軍の神よ、
ねがわくは歸りたまえ、

天より俯視ふしみてこの葡萄の樹をかえりみ、
15 なんじが右の手にてうえたまえるもの

自己みづからのために強くなしたまえる
枝をまもりたまえ。

16 その樹は火にて焼かれまた斫きりたおさる。
かれらは聖顔みかおのいかりにて亡なぶ。

17 ねがわくはなんじの手を
その右の手の人のうえにおき、
自己みづからのためにつよくなしたまえる

人の子のうえにおきたまえ。
18 さらにわれら汝をしりぞき離るることなからん。

願くはわれらを活いかしたまえ、
われら名みなをよばん。

19 ああ万軍の神エホバよ、
ふたたび我儕われらをかえしたまえ。

なんじの聖顔のひかりを照らしたまえ。
然らばわれら救いをえん。



●論文「芸術のたましい」

今度の著作集第二巻の『芸術のたましい』の初めに「芸術のたましい」という書き下ろしの論文がある。ご参考に少し読みます。来月のクリスマスの頃に出ると思います。

○ゲーテの「宗教的」

ドイツの世界的大詩人ゲーテが、リーマーという友人に1810年6月のある手紙の中でこう言った。

「人間は、宗教的であるときにおいてのみ、詩と芸術において生産的です」

ゲーテがここに「宗教的」といつているのは、何か特定の宗教を前提としているのではないことは、彼の宗教に対する関わり方から瞭らかである。

彼は「根源宗教」(Ureligion) といつこともいつた。それは人間のたましいの最も深い関わりの絶対界を指しているものである。

この「宗教的」とは寺院とか、教会堂とか、礼拝堂とか、信条とか、礼拝様式とか、儀式とか、祭典とか、経典すらもその読み方によつてはその中に数え入れなければならないが、そのような、見えたり、聞かれたり、読まれたりする事象や現象や対象における「宗教的」なものは、ゲーテがここにいう「宗教的」ではない。

たましいが、いな実^{いなり}に身心全体が、絶対界に全一的にうちこむ無我的な心境、境地が「宗教的」というのである。芸術にたずさわる、うちこむ態勢が、そういう宗教的な心境においてこそ、本当に「生産的」、創造的である、というのである。

○霊的人物

私はそれをもつと端的に霊的と申したい。この「霊的」はいわゆる「精神的」でも、「心霊的」でもない。霊的とは、たましいが本来の根源的な質において、相において、在る事態を意味する。その意味で、世界の第一級の芸術家は、みな霊的であるといつて可いと思う。そもそも人間の最も根源的、本質的なすがたは、そのたましいが、たましい本来のすがたにおいて在るときであつて、それはたましいが絶対界との深い関わりにおいて在るときのことである。相対界の存在たる我れが、絶対界と相即する境地において、はじめて真に霊的というのであり、そのとき、たましいが、本来のたましいであるといつて可いわけである。人の本来の相が、^{ひと}霊止である所以である。神霊が内に止ま^{とど}まっているという謂である。人間の霊が、神霊と一如の相において在ることである。

それゆえ芸術に限らず、いかなるいとなみにおいても、人間そのものが、以上の意味において霊的でないなら、そのいとなみは最もすばらしい質からは、外れることになる。即ち、文化文明の一切のいとなみの主体が人間である限り、その人間そのものが霊的でないなら、最も高次なものから外れるのである。勿論この場合の「霊的」は、さきにも言ったように、心霊的などという意味ではない。また悪霊などを考える意味



のものでもない。神、天、梵、如来、ダイモニオン、大自然といった絶対者乃至絶対界を主体とし、中心としてこれに即する意味のものである。

たましいが、そういう絶対者、絶対界を呼吸しているような事態を霊的と謂い、そのような人物を霊的人物、霊的人格という。そういう霊的人物、霊的人格が、現代は少なくなっているのではないか。

○神・自然・我

神・自然・我というものが一如的な相関相入関係において呼吸していた大芸術家でゲーテはあった。ゲーテがギリシャ・ローマの古代芸術に接したとき、彼はこいつた。

「古代の崇高なる芸術作品は、とりもなおさず人間が真の自然法則に従って創作した最高の自然作品と見做されるべきものである。あらゆる気ままなもの、空想的なものは崩れてゆく。真の作品には必然があり、神がある。」（『イタリア紀行』1787年9月6日）

天的必然、霊的必然、やむにやまれずして迸り出づる事態。そこに芸術がある。小我が考え、工夫し、作り出してゆくのは技術であっても、芸術ではない。秀れた芸術が生まれる前提として、習得、模倣、考察、工夫、選択、技巧、知識的素材、熟練、等々さまざま要素が一応身につけていることを要するのは勿論のことではあるが、その総和が芸術でもなければ、芸術品を作り出すでもない。むしろそれらのものをアフヘーベン（超脱）してこそ芸術は生まれる。

芸術のたましいは、あるやむにやまれぬ根源衝動である。そのやむにやまれぬものは全人的な衝動でなければならない。天的宇宙的衝動と霊的内的衝動との即如的事態。それを神然と言わんか、霊然と言わんか。大自然が、天然であるように、真の芸術家は霊然、自然たるものにおいて創作してゆくのである。そこに芸術のたましいがある。それが芸術のたましいである。自然界も人間界も、自在にその素材となり、自然と歴史的人間界の大ドラマの中に投我し、渾然たるものをつくり出してゆく、生み出してゆく。シエクスピアの如きは正にそういう大芸術家である。

○神・歴史・我

ダンテは、神厳なる宗教心と熱烈なる情愛の渾然たる魂であった。彼は深刻な失恋を契機として、永遠の女性ベアトリーチェを『神曲』全篇のハートとした。神の義と神の愛を土台に、歴史を審判し、天国、煉獄、地獄の三界をいみじくも構成し、流浪十九年に亙る血と涙の生活を『神曲』にうち込んだ。苦難の旅路即詩作。神にとらえられたたましいが、苦難の中で知情意の一切をあげて詩作した。そのような在り方そこに劇的に展開した『神曲』に芸術のたましいは脈々として活現している。

ゲーテは、自分の全作品は告白である、といった。彼は体験に裏づけられていないようなものを書くことはできなかった。すべての作品に情熱が通い、全一的な彼自身

が多彩に表現されている。いかなる言葉も、単なる智的なものではなく、体験を基^{もと}とした血の通ったものである。何と詩情豊かなものであろう。ここにも芸術のたまし^{たま}いが自在に現前している。

教会礼拝にたましいを吹き込むべく、即興的にカンタータを作つては、それが用ずみとなるや、紙屑のように棄てて顧みなかったというバッハの作曲たましいは、風が吹いては消えてゆくような飄々^{ひょう}たる天韻^{てんいん}であつた。

紙と鉛筆を手にして、林間を逍遙^{しょうよう}し、靈感湧くやいずこでなりとも狂える人の如く作曲したり、月華の脚光を浴びつつ、盲人少女に対する人間愛をもって、「月光の曲」を即興したベートーヴェンの如き。これ、みな、やむにやまれぬたましいの衝動に発したものであつた。

その他ハイドン、モーツァルト、シューベルト、ヘンデル等々、いずれか芸術のたましいを裏証していないものがあるうか。

彫刻の世界で言えば、フェイディアス、ミケランジェロ、ロダン。それは正に身心渾然たる躍動と情熱のかたまりか。静中の動、動中の静の妙境を具現している。ロダンはこう言っている。

『自然』が諸君の唯一の女神でなければならぬ。自然に対して絶対的な信頼を持ち給え。自然は決して醜くないことを信じ給え。そして諸君の野心は、自然に対して忠実であるということだけに限り給え。芸術においてもし醜いものがあるとするなら、それは無性格のものということだ。つまりいかなる外的もしくは内的な真実をも示さないもののことである。」

更にロダンの次の一言は正に至言である。

「大事な点は、感動すること、愛すること、希望をもつこと、身ぶるいすること、生^いきることだ。芸術家である前に、人間であることだ！『真の雄弁は雄弁を軽蔑する』と。パスカルが言った。真の芸術は芸術を軽蔑する。」

人間の造花がどんなに完璧にできあがっても、そこには光がない、生命が通っていない。これに反して、自然の花は、どんなに虫に喰われていても、そこには生命がある。即ち、破れた自然の花は、立派な人間の造花を笑う。虫喰いの活きた花は、立派な造花に優る。そのように作意的な芸術品は、無作の芸術品に及ばない。無作とは、やむにやまれぬ内的衝動によっておのずから成り出た作品のことである。そこに芸術のたましいがあるからである。云々

私はこの論文はほとんど徹夜して書いた。御霊の中に入りますと、こないだも実はしゃべっていて異言が出て困ったんですけれども。

とにかく、私はいろいろ見るにつけ聞くにつけ、荒っぽい言葉でいうと、癪にさわることばかりです。それだけ、私はボヤボヤしていられないんです、正直。何といいますかね、



この頃——この頃といってもこれからのいよいよそうなんです、70歳になつて——私は自分で不思議でしようがない。どうしてこんなに天的生命力に押し出されていくんだろかと。これはやはり、私はこれから為すべき仕事がたくさんありますし、その使命を感じるからなので、今20代の方々は、どうぞ、時間を無駄にしないで、しっかりと戦いの準備をしてください。必ず時が来ますから。なにも焦ることはない。けれども、じつくりと準備をしていただきたい。

この集会はこんな小さな集会ですけれども、どこへいったって絶対に負けません。私が強いのではない。御霊が強いから。そういうことで、皆さんも本当に一切の事態に対して、今日お話しするその角度から——「戦い」という言葉はあまり好きではありませんけれども——戦つていただきたいと思う。

●民族の歴史

今日は詩篇第80篇です。『詩篇珠玉集』（著作集第四巻1980年1月刊）というのは、私はもう大体、50篇を選んである。その中に第80篇もちろん入るわけです。「葡萄樹」という題にしました。

1 イスラエルの牧者よ、

ひつじの群のごとくヨセフを導きたもうものよ、

耳をかたむけたまえ。

ケルビムのうえに坐したもうものよ、

光をはなちたまえ。

2 エフライム、ベニヤミン、マナセの前に

なんじの力をふりおこし、

来りてわれらを救いたまえ。^{きた}

3 神よふたたびわれらを復し、^{かえ}

なんじの聖顔^{みかお}のひかりをてらしたまえ。

然らばわれら救いをえん。

「イスラエルの牧者よ」という。

「エホバはわが牧者なり」

と詩篇23篇にある。実にはつきりと神さまに向かつて、

「イスラエルの牧者よ」

と言いました。イスラエルの民族は本当に神を牧人^{まきびと}として、自分たちを羊の群れとして自覚していた。どの民族にもその民族の歴史があるわけです。イスラエルは遊牧の民ですから、こういうようにした。日本人もこの日本の歴史というものをじっくりまた見直して、そして、どのように我々は歴史的に過去の恩恵をこうむって現在があるかと。これはやはり、キリ



ストの光でもって見ると、よくわかるんです。そういう角度から最初にこの日本を見られたのは、私の藤井武先生です。『聖書より見たる日本』というのは素晴らしい本です。ああいう本をやはり時々読まなくてはいいけません。

「イスラエルの牧者よ、

ひつじの群のごとくヨセフを導きたもうものよ、

ヨセフというのは――アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフという――これは主流の大事な人物です。ヨセフは、ある意味において、歴史的にキリストの予表とされるような人格であつた。兄弟たち皆にないがしろにされて、エジプトに売られた。そして、エジプトで宰相にまでなつた。兄弟たちを今度は逆に助けてやつた。

「お前たちが私をここへ島流しみたいにしたのではない。神さまがやつたんだ」

と言って、兄さんたちの仕打ちをひとつも責めなかつた。そのヨセフが中心である族が即ち、エジプトのイスラエルの民ですから。それで、

「ひつじの群のごとくヨセフを導きたもうものよ」

と。「ヨセフ」というのは「ヨセフの族」ということです。

耳をかたむけたまえ。

ケルビムのうえに坐したもうものよ、

光をはなちたまえ。

「ケルビムのうえに坐したもうもの」は、しょっちゅう旧約に出てくる。レビ記とか出エジプト記にもサムエル前後書にも出てくる。即ち、契約の櫃の上にケルビムが両方から羽で被っている。それはひとつの御座みくらの象徴です。だから、

「うえに坐したもうもの」

という言い方をしている。なにもケルビムの上に坐っているわけではない。天使です。

² エフライム、ベニヤミン、マナセの前になんじの力をふりおこし、

来りてわれらを救いたまえ。

「エフライム、ベニヤミン、マナセ」というのはヨセフの種族のことです。これはラケルだね。ラケルは始め子どもがいなくて困ってしまった。そういう詳しいことは創世記30章前後に書いてあります。この詩は、学問的には大体、捕囚のあととされていますが、列王記略下の15章17節からみると、

「¹⁷ ユダの王アザリヤの三十九年にガデの子メナヘム、イスラエルの王となりサマリヤにおいて十年の間世を治めたり。¹⁸ 彼エホバの目の前に悪をなし、彼のイスラエルに罪を犯させたるネバテの子ヤラバアムの罪に生涯離れざりき。¹⁹ 茲にアツスリヤの王ブルその地に攻めきたりければ云々」(列王記略下15・17〜19)

と。イスラエルの国の、だいたい凋落しているような現実、そういうところにあるものだから、



それでこういった詩が生まれたのだらうという。これは学者のあるひとつの説です。

3 神よふたたびわれらを復し、

なんじの聖顔^{みかお}のひかりをてらしたまえ。

然らばわれら救いをえん。

信仰の天が曇ってしまったている。それで神の光を非常に求めている。

「ふたたびわれらを復したまえ」

というこの言葉は二通りの、二重の意味を持っている。「ハッシベリーム」というヘブライ語ですが、「シーブ」という字は

「シューブ」

という字からくる。「帰る」とか、「帰す」とか、自動詞にも他動詞にもなる。

「我らを帰してくれ」

と。英語でいうと、「リストア」(restore)、「レストレイション」(restoration、回復、返還)だ。即ち、

「自分たちの運命を、歴史的現在の状況を変えてください」

ということと、それからもうひとつは、

「私たちの心を翻して、心をあなたの方へ向けさせてください」

と、そういう二つの意味がこの言葉の中にある。非常に力強い言葉です。ある註解にはラテン語で、

「メタバシス」(変転)と「メタノイス」(回心)

と両方書いてあります。即ち、環境の変化と、それから心の翻り。それは確かにそうだと思います。

●天極道

環境の変化よりも大事なことは、心の変化です。心を翻す、回心、廻らせる。自分や人に向かっている心を神に、キリストにめぐらす。キリストという天極です。私は

「天極道」

という。天極の道。この頃、私は「天極道」なんてことをよく書く。天極に向かうところの在り方を天極道という。磁石の針はいくらでも揺れますけれども、絶対に北を指す。これは引力(磁力)がこつちから来ているから。引力が来ていなくては向きませんよ。キリストの引力は絶対なんだから。

だから、主を心に念ずれば、もう直ちに心はこうなってしまう。それが御霊の世界なんです。いわゆる「信仰」ではそうならない。本当にそこに来ますか、皆さん。まあ、あわてなくなつていいからね、来てくださいよ。どんなことがあっても、グツとそっちへ行ってしまう。これがないともう狂ってしまうです、すべてが。そして現実に負ける。



「再び私たちを」ということは、もうひとつ一人称単数でいうと、

「再び我を汝に帰してください。来たりて我を救いたまえ」

と。帰ればもう救いは当然来ている。帰った瞬間にもう救いは来ている。向いた瞬間に。私はもう簡単になつてしまつてね、すべてが。もう聖書の言葉ですらも少しまどろっこくなつてきた。

3 神よふたたびわれらを復し、

なんじの聖顔^{みかお}のひかりをてらしたまえ。

然らばわれら救いをえん。

輝いているんですよ、神さまの聖顔はいつも。「輝かせたまえ」なんて言つて、こっちがボヤボヤしているから、輝いていないかと思うけれども。ロングフェローの詩の中に、

「雲の彼方には太陽はいつも照っているではないか」

という。その雲を通して太陽が見えないかと。富士山は雲に隠れてもいつも在ると。大自然と心が融合するようなことでなければダメですよ。壮大なるものも、また極めて小さいものも、千変万化、どれにも共感できる。

「帰したまえ」と神さまに言つて、しかしながら、神さまの方で帰してくださいならなければ、こっちがいくら帰ろうとしたつてダメなんだ。その本願に願っているその願い方はいいんですよ、もちろん、願い方そのものは。

「神さま、私は行けませんから、来てください」

と。いいんですよ、それで。小さな子どもがひっくり返つて歩けなくなつてしまつて、

「お母ちゃんー!」

と呼ぶのと同じこと。本願の力は絶対ですから。

「全世界がその子を退けても、母は全世界となる」

という有名な言葉がある。

「全世界が逆らつても、神さまは味方である。キリストは味方である。何をか恐れん」というのが私たちの信仰であります。ドイツのヘルバートという人の言葉だ、

「母は全世界となる」

とは素晴らしい言葉です。

●具体的な表現で象徴的なもの

4 ばんぐんの神エホバよ

なんじその民の祈にむかいて何^{いずれ}のときまで怒りたもうや。

祈りに逆らつて怒りたもうやと。

5 汝^まかれらになみだの糧^{かて}をくらわせ

涙を量器^{ます}にみちみつるほどあたえて飲ましめ給えり。



イスラエルの歴史は多分にそういうところがある。

6 汝われらを隣人のあいあらそう種料となしたもう。

われらの仇はたがいにあざわらえり。

いろんな外敵がいますから。あまり具体的なことは書いてないけれども、とにかく相当いろんな歴史的な悲劇を通ったあとで作られたものだ。神の怒り。

「いつまで民の祈りにむかいて怒りたもうや」

と。イスラエルの神さまは一面、おつかない。不信の事態を怒る。荒野においても怒って地が割れて、背いたのがみんな地の中に吞まれたという事態もあったでしょ。偶像なんか造ったから。モーセもその事態を見て怒って、いつペン律法の石板を投げつけて割ってしまった。これは義の神であるから。しかし、愛すればこそその怒りであって、ただ憎いから怒るのではない。

5 汝かれらになみだの糧をくらわせ

涙を量器にみちみつるほどあたえて飲ましめ給えり。

と。その涙の原因は自分たちの側にもあるわけだ。そして、隣りの笑いともなる。向こうも悪いけれども、こつちも悪いところがある。

7 万軍の神よ、ふたたびわれらを復したまえ。

汝のみかおの光をてらしたまえ。

さらばわれら救いをえん。

同じ言葉が今の3節、7節、14節、19節と4回、リフレインして繰り返してくる。そこにこの詩の生き生きとした、また切々たるせつなさがあるわけです。

「ふたたびわれらを復したまえ。汝のみかおを輝かしたまえ。さらばわれら救

われん」

と。「汝のみかおを輝かしたまえ」なんていう言葉は、普通はちよつとわからないですね、

「神さまに顔があるか」

なんて。そういう非常に擬人的な表現をするから、ヘタすると躓く。しかし、イスラエルの神は「牧者」といつて、そういう非常に具体的な表現でいう。

そういう意味において、具体的な表現で真理を表している象徴的なもの、これを詩というんです。私は曠愛新書第1号（『福音の心臓』1965年3月刊）の「実存と詩想」（三、霊的詩想）という論説に書いたでしょ。あの通りです。

神さまは――他の宗教でも「光」という言葉は宗教に共通なものですけれども。「お光教」なんていうものもあるし、そういうのと混同されては困る――現象では似たものがあっても、質が、内容がちがうわけです。私たちににとっては何といっても、キリストが中心です。キリストを中心にしなかったらダメです。

マルチン・ルターは、



「ヤーヴェー」「エホバ」「主」

という言葉、旧約から新約にいたるまで、そこにおいて「キリスト」と読んでいた。ルターくらいキリスト中心のはつきりしたのはいなかった。そして、「神の言」ということを非常に言つて、まさに「聖書の人ルター」なんだ。けれども、ルターは決して「聖書の言」を、いわゆる垂流が考えているような意味でもってルターは言っているのではない。ルターの言つた素晴らしい言葉がある。

「聖書の言はかけらみたいなものだ」

と。かけらみたいなもので、これは全きものではないと言っている。その奥に隠された言葉がある。「根源語」という言葉を彼は言っていないけれども。聖書は不完全なものだ。かけらみたいなもので、私に言わせると、氷山の一角だ。聖書に表れているのは氷山の一角で、あとの七分の六は隠れている。これをもつて金科玉条にして、

「聖書にこうあるから、なんのканの」

と言葉にこだわっているのは、

「儀文は殺し、霊は生かす」

とパウロが言っているところの「儀文は殺し」の方になってしまう。聖書の言は暗号ですから、この暗号が何を持っているかと、その根源語が読めてこないとね。これはヘブライ語でもギリシア語でもない。まさに神の言は異言の世界、霊言の世界です。だから、もう何といえますかね、絶言絶慮です。

「もし、キリストの言つたりしたことをあげたら、とても載せきれない」

と、ヨハネ伝の終わりの方に書いてある。どうぞ、皆さんは、そういった意味で、本当に御霊における自由をもつ。御霊における自由というのは勝手ということではない。それは一番深い意味において聖言に即します。けれども、聖言の表面に即しているのではない。

●信即現

7 万軍の神よ、ふたたびわれらを復したまえ^{かえ}。

汝のみかおの光をてらしたまえ。さらばわれら救いをえん。

この「万軍の神よ、ふたたびわれらを復したまえ^{かえ}」と読んだときに、皆さんはどういう読み方をするんですか。天の万軍をひきいている神さまですよ。その大將はキリストです。

「ふたたびわれらを復したまえ」

と祈れば、自分を翻してかかっている祈りでしょ。

「祈れば直ちに聴かれたりとせよ」

とキリストが言つた。あれは大事な言葉です。祈りが即、現実であるということです。祈りの内容が即、現実である。

「汝のみ光を輝かせたまえ」



と言うやいなや、み光がくる。光の中に入る。

「されば我ら救われん」

と言った時にもう、「救われました」と、そういう即の世界、現^{うつ}の世界。即現^{うつ}。信は即、現である。信即現である。

聖書を読むことが同時に祈りであり、祈りが同時に現実であるということです。そうしたらばもう、聖書は楽しくてしょうがない。ポケットの中に入れておきなさいよ、そして電車の中でもどこでも二、三句読めば、もうそれで力がきてしまう。そういう、普通の人と考えたら、キチガイみたいなものだ。けれども、キチガイではない。いちばん正しい。それはもう旧約の詩篇の作者以上の境地に入ってしまうわけです。

8 なんじ葡萄^きの樹をエジプトより携えいだし

もろもろの国人^{くにびと}をおいしりぞけて之^きをうえたまえり。

とは何ですか。エジプトから葡萄^きの樹を持って来たんですか。「葡萄^きの樹」というのは、イスラエルの民族、ヨセフの族^{やから}ということです。イスラエル民族、ヨセフの族を「葡萄^きの樹」といつている。これで私たちが想い出すのは、ヨハネ伝15章、イザヤ書5章。このイスラエル民族は葡萄^きの樹で、神さまは農夫で、キリストは根っこですよ。預言者や使徒が幹かもしれない。そういう葡萄^きの樹。だから、これは本当のイスラエル、いわゆる民族的イスラエルではなくて、霊的イスラエルです。我々はその霊的イスラエルに連なっているところの枝であり、葉である。

私は月桂樹が好きでね、

「汝は月桂樹なり」

と言ったつていい。これはいつでも星のような果をもっている。葉は天に向かって、香りがいい。ローレルの樹、あるいは棕櫚の樹。

「葡萄^きの樹をエジプトより携えいだし、もろもろの国人^{くにびと}を追いつて之^きを植えた」

なんて、愉快的言葉だ。これはカナンに来て、カナンの先住民族をやっつけて、イスラエルの約束の地カナン——今のパレスチナ——にすえたという歴史的なことをこういうように言ったわけです。

9 汝そのまゑに地をもうけたまいしかば

深く根^ねざして国にはびこれり。

「深く根^ねざして」という。深く根^ねざさなければダメだな、地下水まで届かなければ。そうすれば、いくら日照りでも大丈夫です。

私たちはキリストの中に深く根^ねざさなかったら、いろんな現実でもって負けてしまう。我々はそういう葡萄^きの樹で、キリストに深く根^ねざしてくださいよ。樅^{もみ}の樹は石を割つても根を深くおろしていきます。あのハイネの「ハルツライゼ」に書いてある。石を割つて根



ざしていく。そして亭々^{ていてい}とそびえる。どんな嵐がきても、ぶっ倒れない。根ざした信でなかったらば、日照りがくれば枯れてしまうし、風が吹けば倒れるし。神さまに、キリストに根ざしていれば、どんなに行き詰まったようにみえても、必ずよきときに展開してください。まずから、人間的に考えたらいかん。じつと待っていればいい。

まあ私なんかもやつと70歳になってこういう境地になったんだから、バカみたいなもんですよ。あなた方は若いんだから、遠慮しないでどしどし凄くなってください。

「大道無門、千差路有^{みち}り」

という。みんなそれぞれの路がある。のつぴきならない路を歩いていく。

「此の関を透得^{けんこん}すれば乾坤独歩^{けんこん}」
という。

●即如の世界

10 山々はその影にて被われ、

葡萄の葉の影で被われる。素晴らしいよ、この言い方が。「山々がその影で被われる」なんていうのは全く比喩的な言い方です。葡萄はそんなに成りっこないんだけども。

神の香柏はその枝をもておわれたり。

神の香柏まで葡萄に被われてしまった。即ち、この「葡萄」というのは、比喩的にイスラエルの民の生命力を、神における生命力をいつている。

11 その樹はえだを海にまでのべ、

その若枝^{わかえ}を河にまでのべたり。

「海」というのは地中海。「河」というのはユーフラテスの河。だから、樹が西と東にグーッと伸びてしまった。これはダビデの全盛時代だな。

12 汝いかなればその垣^{かき}をくずして

路^{みち}ゆくすべての人に摘^みみ取らせたまうや。

どうしてこんな惨めなことになるましたかと。

13 はやしの猪^{いのしし}はこれをあらし、

野のあらき獣はこれをくらう。

牧者が、羊飼いまた葡萄の庭師がはつきりと守ってくださいらないから。イザヤ書5章に、

「われわが愛する者のために歌をつくり、我があいするものの葡萄園^{ぶどうその}のうたをうたわん。

イスラエルのことを今度は、「葡萄園」といいました。

わが愛するものは土肥えたる山にひとつの葡萄園をもてり。2 彼その園をすきかえし石をのぞきて嘉^よきぶどうをうえ、そのなかに望^{ものみ}楼^みをたて酒槽^{さかぶね}をほりて嘉^よき葡萄のむすぶを望^{ものみ}みまてり。



「望楼^{ものみ}をたて」というのは、外敵がくるから、また狐やなにかが来て食べてしまうから。然る^{しか}に結びたるものは野葡萄なりき。

イスラエルの実存の悪いことを「野葡萄」といった。これは即ち、

「根源の水なるエホバを忘れたから」

と、エレミヤ記の2章にあるのと同じようなこと。

3 さればエルサレムに住めるものとユダの人よ、請うなんじら我とわがぶどうのとの間をさばけ。4 わが葡萄園にわれの作^{なし}たるほかの何のなすべき事ありや。我はよきぶどうの結ぶをのぞみまちしに、何^{いか}なれば野葡萄をむすびしや。

すつぱい野葡萄になつてしまつてしようがないじゃないか。神さまの期待を裏切つたではないかと。

5 然^{され}ばわれわが葡萄園になさんとするを汝等につげん。我はぶどうその籬^{まがき}笆^きをとりさりてその食いあらさるるにまかせ、

今のこれです、「食いあらされるにまかす」という、さつきの詩篇と同じ。

その垣^{かき}をこぼちてその践^ふみあらさるるにまかせん。

外敵にまかせてしまうぞ。これは私のお前たちに対する審きだぞと。

6 我これを荒らしてふたたび剪^かることをせず耕すことをせず、棘^{なげう}と荊^{こぎ}とをはえいでしめん。また雲に命^{おほ}せてそのうえに雨ふることなからしめん。

枯れてしまうぞと。

7 それ万軍のエホバの葡萄園はイスラエルの家なり。

はつきり言っているね。

その喜びたもうところの植物^{うえもの}はユダの人なり。これに公平をのぞみたまひしに反^{かえ}りて血をながし、これに正義をのぞみ給いしにかえりて号呼^{さけび}あり。」（イ

ザヤ5・1〜7）

「号呼^{さけび}」というのは戦争の叫びのことです。そういう期待がすっかり裏切られてしまつたと。それで、

「申し訳ないけれども、帰つてきてください。何とかしてください」と言つて祈っているわけだ。

14 ああ万軍の神よ、ねがわくは帰りましたまえ、
「あなたがこつちへ向いてください」と。

天より俯視^{ふしみ}てこの葡萄の樹をかえりみ、

15 なんじが右の手にてうえたまえるもの

自^{みづ}己^{みづ}のために強くなしたまえる枝をまもりたまえ。

「自^{みづ}己^{みづ}のために」と。神さまのためにある。こつちのためではない。我々の存在は神のため



にある。だから、その現実にするところは、「に在りて」という、

「神に在りて、キリストに在りて」

とならなければ、その現実にはならない。

「二、三人わが名に在りて集うところにわれもまた在り」

という。

「わが名に在りて」

です。「わが名のために」ではない。わが名に在って集わなかったら――「ために」なんて
いつて、こつちから何か「ために」のようなことを言つてたら――ダメだ。

「わが名にあつて集まるところに私もいるぞ」

ということ。即如。即如の世界です。

新約聖書というのは、それをじっくりとした構造でやっているのがパウロのローマ書、ガラテヤ書で、これが一番その中心です。それから雄大に展開しているのがエペソ、ピリピ、コロサイ書です。コリント前後書は現実のいろいろな問題に対してパウロが言っている。そういう幹と枝。

「あなたの植えたまえる幹と枝をまもりたまえ。あなたに連なっているものだから、
あなたのものだから」

と。

16 その樹は火にて焼かれまた斫りたおさる。

かれらは聖顔のいかりにて亡ぶ。

ところが、せつかくのそれがダメだと。

17 ねがわくはなんじの手をその右の手の人のうえにおき、

自己のためにつよくなしたまえる人の子のうえにおきたまえ。

「右の手の人」とか、「人の子」という。「右の手」というのは力を表す言葉で、「神の右の手」ともいいます。「なんじの手をその右の手の人のうえにおき」とは、

「汝の手を汝の右の手の人の上におき」

ということで、

「右の手がつかまえている人の上に置いてください。汝が右の手を置いているその人の上にしっかりと手を置いてください」

ということです。しっかりとつかまえて、

「永遠の腕にいだきたまえ」

なんていう言葉もあるね。

18 さらにばわれら汝をしりぞき離るることなからん。

願くはわれらを活したまえ、われら名をよばん。

19 ああ万軍の神エホバよ、ふたたび我儕をかえしたまえ。



なんじの聖顔のひかりを照らしたまえ。然らばわれら救いをえん。
と、同じ言葉が四回、繰り返されている。

●「イン」の中に「という世界

「葡萄の樹」は、ヨハネ伝15章をちよつと開いていただきましたようか。あまりにも有名なところですよ。7節がきわめて大事な言葉。

「7汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、

「我に居る」ということと、「わが言が居る」ということが同義語につかつてある。

何にても望みに随したがいて求めよ、然らば成らん。」

神さまと一つに、キリストと一つに——「居る」ということはその中に「宿る」ということですから、

「キリストをお宿とせよ」

ということ——「居る」というのは「宿る」ことです。日本語でも「宿る」というのが一番いい。懐の中にいることです、「居る」というのは。「リメイン」(英)、「ブライベン」(独)、「メネイン」(ギ)という。

「お前たちが

「お前が」でもいいですよ、単数でも複数でも

私の中に宿って、私の言がお前の中に宿るならば

と。「言が宿る」とは、言が受肉することです。神の言が化体すること。このこともルターが「フライハイト」(キリスト者の自由)の中で言ってます。

「言に化する」

とまで彼は言っている。この「言」がいわゆる言葉ではないからね。

「わが言は靈こゝろなり生命いのちなり」

という言だから。キリストの霊、生命に化するわけです。そういう、「即宿る」という、この「イン」の中に「という世界。そういう世界は神秘なんです。

そういう信仰的神秘を無教会は嫌っていた。一生懸命で言葉の意味だけを解釈している。そして、いつもキリストと我というのがこうなつて(離れて)いる。対している。

「キリストを信ずる、に信頼する」

と、せいぜいそれくらいのところだ。藤井先生でもまだそのくらいが多かったね。「中に」ということをはつきり言わない。それは聖霊が来てないから仕方がない。御霊の世界に入ったら、パウロが

「私はキリストの中に十字架されました。もう生きていません。キリストが私の中で生きています」

と言つてるじゃないですか。何ですか、



「キリストの中に生きている」

と形容詞で言っているんですか、これは。

「御霊のキリストが、キリストの御霊が私の中に生きているではないですか」

と、パウロは言っている。そういう素晴らしい「即」の神秘の世界、「即」の現実。この即の現実――私は空気に包まれています、空気を吸ってます、空気と私は即の世界です――あなた方一人ひとりが、その肉体的存在は、空気とは切っても切ることのできな存在ではないですか。そのように、我々の魂が生きているというなら、キリストと即に入らないで、なぜ生きていると言えるか。

そういう「イン」の世界です。もう

「信仰が強くなりました、弱くなりました」

と、そんなことを考えることはいりませんです…（異言）…。その世界にグッと入る。そういう「イン」の世界が、もう何ものをもつてもごまかすことのできない、本当の世界なんです。だから、

「汝らもし我に居り、我汝らのうちに居らば」

という。ヨハネ伝の素晴らしさというのは、そういう即の世界を端的に語っているからです。本当に祈りの世界でそこに入ってくださいよ。なにか「祈り」というと、特別な身構えがあるかと思うが、何も身構えなんかいらん。電車の中だつてどこだつて祈れるよ。それを

「幼児のこころ」

というんです。ちつとも難しくない。私みたいにバカにならなければダメですよ、みんな利口すぎるから。もし、私の真似をしようと思ったら、小池先生のようにバカになること、その他にない。

「汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば」

「言がお前の中に本当に化体して生きているか」と。そうしたら

何にても望みに随したがいて求めよ、然らば成らん」

と。中に入っているんだから、求めることは、キリストと即のことを求めているわけです。即のこと、それは必ず成る。現象としては、

「万よろずのこと時あり」

だから、しばらく待たなければならぬかもしれないかもしれませんが、けれども、根源的にはもう成っている。未来完了はちゃんとここに現在完了として受けとっている。終末の世界は、新天新地は既に来ているのです、双葉の姿で。それが本当の望みを持っているひとなんです。

「御国をきたらせたまえ」

と祈れるのは、御国が来ているから祈れるんです。必ず御国はきたる。世界がどうひつくり返ろうが。



●「主さま！」と呼んで祈る

私は終戦後数年して、「日本国民に寄す」という詩を書いた。けれども、現状をみて、それを発表するが嫌になったから、やめた。今度の第二巻に書いてあります。これは「ああ玉杯」の譜でもって歌うようになっていてる。

私はもう泣きたくなるよ、正直。私はどんなに借金しようが何しようが、著作集は十巻まで出しますから。真理をはつきりと語っておかなければしょうがないからね。

そういう、神さまの御意が本当に成っていくこと、これが最も力強いことで、ちょっと現実がよくなったなんていう、そんなことではない。ですから、それだけの捨て身の態勢で、いかなる艱難も突破していく。

とにかく、今の日本の精神状態はもう、一番悪いのは教育者。教育者が小学校から大学にいたるまで本当の世界を持っていないから、魂の教育ができない。責任は教育者です。それから親。親が本当に魂の育てをしない。要するに、専門の教育者が一番悪い。だから私も教育界を簡単に去るわけにいかない。責任があるから。

「⁸なんじら多くの果を結ばば、わが父は栄光を受け給うべし、

けれども、「多くの果を結ばば」という「多く」なんていう言葉にこだわってはいかん。キリストは果を結ばなかった。キリストは地上にいては、とうとう一つも果を結ばない。みんな散ってしまった。十字架にかかったのはキリスト一人で、あとはみんな散ってしまった。弟子も。一番弟子のペテロがキリストを二度否みました。けれども、その先をもうひとつキリストは見ている。

「今に私が聖霊をくだしたら、お前たちは立ち上がるぞ」

と。そうしたら、多くの果が、無数の果が結ばれてきた。

伝道は、すぐ

「成功した。何百人も、何万人も」

とかいうが、とんでもない話だ。そんなことではない。極端に言えば、

「あなた方の中にたった一人のひとが本当に私と同じ気持になって進んでくれるなら、私はそれで結構なんだ」

と。あなた方一人ひとりがそれになってくださいよ、本当に。

この天界の兄貴「政美」、27歳で仆れました。けれども、私はこの兄貴の存在をもってした祈りに応えているわけです。

⁹父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。

「われに居れ」

ということとは

「わが愛に居れ」

というのと同じことですよ。



私がなぜ、祈りの世界で「お父さま」とあまり言わないで、
「主さま」

と言うのは、キリストが贖い主であり、父なる神の愛を具現したただ一人のひとだから。
だから、私は、「お父さま」と言うよりも、私には「主さま」と言う方が身近に感ずるから、
言うだけのなしで、「お父さま」と言っただけで祈った方がいいですよ、いくらでも。

「天にまします我らの父よと祈れ」

とキリストはそう言われたけれども。キリストにとっては

「天にまします父」

なんだけれども、私たちにとっては

「天にましますキリスト」

です。キリストは同時に父だから、「お父さま」と祈った方がいいですよ。その中に必ずキリストがいなかったらダメです。キリストぬきの「神・我」の即なんて言ったら、これはいわゆる神秘主義になる。これはダメです。本当の言葉の意味においてまさに「三位一体」なんです。「三位一体」ということを、いろんなことを言っただけでゴタゴタやっているけれども、あんな議論はしたくない。

●神は大芸術家

私たちは、彼らが葡萄の樹であるように、私たちもまた霊的イスラエルの葡萄の樹である。そうすると、「エキュメニカル・チャーチ」なんていつている、「教会一致運動」とか。人間的統一はいらん。みんなそれぞれの在り方でいい。四角でも三角でも星の形でも五角でも丸でもいびつでも瓢箪でも。みんなそれぞれの在り方でいい。ただそこに本ものが光っているかということだけです、問題は。無教会でも何でもいいよ。ところが、「無教会主義」なんて言っただけで、主義的な主張をするから、「ナイン」と私は言うんだ、

「そうじゃない。福音を主義に限定して何になるか」

と。もうしょうがないよ、結局、私は孤独です。けれども、いいんです。それぞれ本当に在ったら、神さまは大きな調和をなさる。私のその詩の中にも出てくる。

「自由独立、そこに本当の融和をつくるところに大和がある」

と書いた。それぞれ自由独立で、しかしながら、そこに本ものがあれば、神さまはこれと大きなハルモニーに、調和にしてしまう。コスモスにする。大きな調和、大調和をなす。

みんな菊だったかどうか。バラもあったり、桔梗おみなえしがあったり、女郎花おみなえしがあったり、リンドウがあったり、これが百花繚乱で、それでうるわしいのではありませんか。バラがきれいだからといって、みんなバラになったらどうするんですか。そういうのを全体主義という。類型的になってしまう。あなた方はみんな顔がちがう。

「私はあの人の顔みたいになりたいな」



なんて、何を言っているか。神さまがつくった顔が一番いい。それぞれの顔は天下一品にできている。世界中にO君と同じ顔は一人もいない。顔ばかりでない。指紋までそうだと
いうのだから、不思議なものだ。

それほどにまで、神さまは大芸術家ですよ。最大の芸術家は神そのものです。なぜそういうことを大胆に言わないのですか。大交響楽もそうだよな。コンダクターだ、神さまは、作曲家でありコンダクターだ。どこか調子が狂うと、さつと言うわけだ、

「お前は調子がくるっている」と。

それぞれの在り方で大コスモスになる。だから、人間的に工作はいりません。しかしながら、本ものが光っていれば、お互いに尊重します。

「ああお前の星の形はいいな。お前の五角形はいいな。お前の中に本ものがあるから」

と、それぞれみんな尊重しながらいく。いろいろな国の政治の在り方はそれぞれでいいですよ。ただ、それ自体において間違っていれば、

「それは間違っている」と言うだけの話で、

「うちのような考え方になりなさい」

なんて、そんな必要は一つもいらん。ペテロはペテロらしく、パウロはパウロらしく、ヤコブはヤコブらしく、ヨハネはヨハネらしく、表現している。けれども、みんな根源の聖霊の世界からものを言っているから、これが大調和をなしている。そういうことですよ。

「パウロ的に考えなければいけない」

なんてどこにも書いてない。パウロも、

「パウロの弟子だとか、アポロの弟子だとか、ペテロの弟子だとか、なぜそんなことを思うか。キリストは別^{わか}たるものならんや」

と言った。それぞれの在り方でもって表していく。皆さんの生涯そのものが神さまの微妙な芸術作品、生ける芸術作品であってください。

だから、それは人間が連なろうなんて思わなくなつて、ちゃんと連なっているんだ。御霊の生命がきていれば。お互いに本当に結んでいる。そこが本当のエクレシヤです。これはブルンナーさんが『教会の誤解』という本を書きましたが、あれは本当に名著です。

● 祈り

イスラエルの牧者として歴史に表れた実存の神さま。また、究極において我らの贖い主キリストにおいて自らを顕したもうた神さま。今日はまた、詩篇80篇を通してイスラエルの民を葡萄の樹としてこれをカナンの地に植え、根を張らせ、枝を張りまた葉を茂らせた、



そのあなたのご栄光の現れです。しかしながら、それに背いて野葡萄と化してしまったイスラエルの惨憺たる歴史、その中から、

「どうぞ、かえりたまえ。汝の聖顔の輝きをあらわしたまえ」と、切々と祈った詩篇。

主さま、今、世界はそのように、それよりもっと悪しくあなたから背いています。どうぞ、この20世紀の現実にあなたのみ光がキリストを通して顕れていることを証し、いかにもして私たちキリストの証者として、

「汝らは世の光なり」

と、光とせられ、

「汝は葡萄の樹なり」

と、花を咲かせ果を実らせるところの事態をいよいよ現実たらしめたまわんことを切に願ひ奉ります。

苦しめる者、悩める者、また迷える魂、いろいろありますが、どうぞ、それらにでつくわして、そして、このキリストの葡萄の樹の連なりの中に入れるように、私たちの生涯をいよいよお使いください。生きることが直ちに使命であり、伝道であります。どうぞ、そのようにして――私たちはただ小さな垣根をつくっているではありません――本当に自由自在に一人びとりをそのようにお使いくださらんことを願ひ奉ります。

この国は本当に教育界において絶望的な現実であります。しかし、望みなぎところにもなお望みをあなたからいただいて、私たちは、この福音にふれた者は、生きることが次の時代の者を教育することであることを、一人びとりが次の時代の者たちに本当に身をもつて伝えていくことができますように。そこに日本の本当の教育の一番大事な面があることをいよいよ自覚して進ましめたまわんことを願ひ奉ります。

やがてクリスマスがきますが、いよいよ兄弟姉妹たちの上にあなたの今年の最後の仕上げをなすべく、大いに頑張らせてください。また、U君が新しくクリスマスと共に発足しますが、我々これに祈りをもつて向かい、そしていよいよまた彼を通して、あなたがその若き魂に福音を伝えてくださるように願ひ奉ります。今朝はまた、O君のところに新しき男子が与えられ、感謝いたします。どうぞ、母子共に平安と力を与えられていきますように。まことに彼女は素晴らしい信仰の器です。どうぞ、あなたがかく祝福してください。たことを感謝いたします。今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に聖名により捧げ奉る。アーメン。

